

キ・ケリ研究史概観

— 付, 編年体研究文献目録 —

加藤 浩 司

序 本稿の目的

古代語における「過去(回想)」の助動詞キとケリは、同一の構文的・意味的条件下で用いられることがある。この場合、両者にはどのような意味・機能の差異があるのか。私はこれまで、この問題についていくつかの文献を資料として考察を試みてきた。その結果、原則として、両者は、表現しようとする過去の事象について表現主体が直接目撃・体験した記憶があるか否かによって使い分けられていると考えられた。これはかつて英語学者細江逸記氏が『動詞時制の研究』(昭和7〔1932〕年泰文堂刊)において主張した説を広義に解釈し直したものであり、結果として私の研究は同説を擁護するものとなった(加藤①1992, 同③1994, 同④1995 a, 同⑤1995 b, 同⑧1996 b。いずれも付載した研究文献目録を参照していただきたい。以下同じ。)

上述した試みを通じて、私は、名詞や動詞のように、表現されている事物や事象そのものに関わる客体的な意味を有する要素と比べて、助動詞キ・ケリのように、表現主体の判断作用や認識方法の差異などに関わる主体的な意味・機能を有する要素について記述することが、研究方法上いかに困難であるかを感じた。たとえば、当該の文献全体を通じて作用している表現主体の叙述態度の特殊性の影響によって生ずる例外的用例の存在や、和歌など具体的な表現の場面から切り離された言語表現によって意味・機能を推定する危険性などである。これらの事実は、従来多く見受けられた、前後の文脈付きで数文からなるキ・ケリの用例を数多く集め、それらを解釈して帰納的に意味・用法の記述を行なうといった方法に、ある種の限界があることを示している。

本稿では、キとケリの意味・機能の差異に関する従来の代表的な研究を、それらに含まれる研究方法上の問題点を指摘しながら概観したい。そしてそれがどのように克服されてきたか、また残されたままになっているかを検討し、現在の研究状況における主要な問題点を、上述した点も含めて、整理しておきたいと思う。

1 近代以前の研究—解釈と作歌のための—

近代以前の代表的な研究として、近代以降の諸研究にも大きな影響を与えてきた、二つの語学書を採り上げる。

成章1778は和歌に用いられる「あゆひ(助詞・助動詞等)」を個別的・網羅的に記述説明している。当時までは広く行なわれていた処置らしいが、キを終止形とそれ以外の活用形とで別種の「あゆひ」として扱っている。「き(終止形)」については

過ぎたる事を確かに定めて言ふ言葉なり。ただし、全く人に向かひて言ふ言葉にて、たまたまひとりごとにいふとも、自から問ひ自から答ふるほどの心のみ詠むべし。里「タ事ゾ」「タ事デアツタ」「タコトデゴザアル」など言ふ。(中田祝夫氏・竹岡正夫氏『あゆひ抄新注』昭和35〔1960〕年風間書房刊、P.306)

と述べ、「過去の確述」「対話、又は自問自答用に詠むときの語」と説明している。次に「し(連体形)」については

〔きしかたのし〕といふ。《し家》の〔し〕を〔然し〕といふ。まがはずべからず。今よりいにしへの事をいひ、今日より昨日の事を言ふたぐひなり。里「タ」と言ふ。(同書 P.328)

と述べ、「過去」の事象を表わすと説明している。「せば」は「仮定」で「まし」や「べし」等と呼応する表現、「(こそ)～しか」は「なしたる事の思はずになれるを、対(むか)へ思ひて言ふ」語、「しかど・ども」は「きしかたの事、それはそれながらいささかあらぬよしをいふべき」語、「しかば」は「きしかたの事の今の事をなせるを言はむとて、ことわれる」語、とそれぞれ説明している(同書 P.329～331)。現在でも問題となる「せ」を除けば、「し」「しか」の形態に共通する意味は「きしかたの事」「なしたる事」であり、「過去」の事象を表わす要素として分離することも考えられてよかつたのではないかと思われる。

対してケリについては

〔けり〕は『万葉』に「来」と書きたれど、まことは「来有」の心なり。すなはち〔き〕の立居なれど、〔き〕とのみ詠めるにくらぶれば、例のなり文字添ひて心ゆるべり。〔き〕は人に近くあひむかへるやうに言へり。〔けり〕は同じく言ひ定めたる言葉ながら理にかかはれるかたが重くて、みづから言へる言葉となれり。里「物ヂヤ」「事ヂヤ」と言ふ。また、その所々によりて「タコトヂヤ」「タモノヂヤ」と「タ」文字を添へても心得べし。(同書 P.307)

と述べて、「き」と同じ「確述」の語だけれども、「き」が「対話」用なのに対してもっと論理的な傾向が強くて自分自身に言い聞かせる語であると言う。また、「き」が俚言で常に「タ」を含んでいたのに比べ、ケリは基本的には「タ」を含まず、場合によって「タ」を添えるとしている点は、共通して「過去」の事象を表わすという説明の含まれているキの類とケリの差異に関する言及として注目される。対象が和歌における用例に限られた場合ケリに「過去」を表わすものが少ないことは、現在の研究においても指摘されている(田中1970, 吉田茂晃1989)。ただしこれが和歌以外にも当てはまるとは言えず、この傾向をすぐさまキ・ケリの意味・機能すべてに拡大することは危険である。

この成章のキ・ケリに対する説明は近代以後今日に至るまでしばしば引用され参考とされるものである。ただし、研究者の中には成章の『あゆひ抄』という書物全体の検討を充分に行なわないで、この説明の部分だけを参照・引用して自説の論拠の一つとする傾向が見られる。中田祝夫氏・竹岡正夫氏の『あゆひ抄新注』「解説」には、キに対する成章の説明を誤解している学者の例を挙げ、「これはまず、『あゆひ抄』は和歌にのみついて研究している書であつて、散文や会話文についてのものでないという根本を忘れており、また、終止形の機能にも思い及んでいないという事を暴露している(同書 P.50)」と批判しているが、同書が和歌における用法のみを記述説明したものである点、及びキに関しては各活用形別に記述説

明されているため、その活用形独自の用法の特徴が説明に混在している可能性がある点については、今後とも注意して参照しなければならない書であると言えよう。

宣長1785は主に係り結びの現象を指摘したものであるが、巻一「三転証歌」で、初めて「き」「し」「しか」という形態を一語としてまとめた点が注目される。巻六でキを「過去」とし、ケリには特に意味の説明がないが、「おしはかるけり」として十数首の短歌を掲げ、「件の歌共のけりは。これをもてかれをおしはかりしところにおけり。つねのけりとは意かはれり (P.224)」とする。ケリに一種の推定の用法があることを初めて指摘したというべきであろう。この書も和歌における用法を中心に記述説明したものであり、『あゆひ抄』同様に注意が必要である。

2 近代以降の研究—諸家の文法学説における記述—

次に、従来の国学者達の研究に加え、新たに西欧の文法研究の観点が導入され、数々の国語文典が編まれた、明治以降昭和初期までの諸家の文法学説におけるキ・ケリの意味・機能の差異に関する言及を概観したい。

大槻①1891は英文典の考え方を採用し、ツ・ヌ・タリ・「せり(後のリ)」を「動作ノ方^マニ終ハリタルヲ云フモノ」として「第一過去(現在完了)」, キ・ケリを「動作ノ過ギテ程歴シヲ云フモノ」として「第二過去(過去)」, 「てき・にき・てけり・にけり」等を「第二ヨリハ、一層程歴タリシヲ云フモノ」として「第三過去(過去完了)」とした。キ・ケリ二つの意味に関しては「相同ジ」であるとしている。大槻②1897もほぼ同じである。英文典流の考え方から現在・過去・未来という時制観を導入し、「過去」としてキ・ケリを並立させたところに、後にこの両助動詞の差異の問題が生じたわけである(馬淵1964参照)。

草野1901はケリに「過去」と「気づき・驚嘆」の用法の二種類を認めている。後者はそれまで「詠嘆」の用法とされてきたものを捉え直したもので、北原保雄氏に拠れば「気づき」「発見」の意味を提唱した「嚆矢、あるいはそれに近いものであると思われる」という(同書解説P.15~16)。キについては「過去」の用法のみを挙げている。そしてキとケリとの「過去」の差異は、

きハ単ニ過去ノ動作又ハ有様ヲ示スニ用キルコト、けりノ過去ヲ示スモノト大抵同様ナリ。但シきハ人ト直接ニ談話スル時、即チ対談スル時、又ハ対談セリト看做スベキ時ニ多ク用キル古例ナリ。(但シ常ニ必ズシモ然ルニ非ズ、後ニイフベシ。) けりハ多ク単ニ過去ノコトヲ記録スル時ニ用キルコトナルヲ、きモ同様ニ用キルコトアリ。故ニ今日トナリテハ、強ヒテ其区別ヲ設クルニモ及バザルベシ。(P.151~152, コトは原文では合字だが改めた)

と述べて、成章1778の説を和歌以外に拡大解釈した見解を示している。散文でこれが当てはまらない例が多いのは当然であるが、草野氏自身もそうした例を挙げて、厳密にはこうした説明で両者の区別がつかないことを認めている(P.153~154, 165~166頁)。

三矢1907はキとケリの意味を「過去」としたうえで、

「ケリ」も「キ」の存在態なり。されば「キ」と等しく過去ながら、此は其の過去の動作を存在的に間接に記述するにて或る場合には継続態とも見るべし。(中略) 此の存在

継続の意義次第に転じては、時に関せず専道理にかかること、動くまじき事の意を強むるに用う。是の用法ケリの半を占む。「色マサリケリ」も過去といふよりは過去にも然りしこと今も然り未来も然る理を述べたりと見る方穏当なり。案ずるに物の道理は帰納によりて定まる、その帰納は過去の事実なれば過去の形式やがて理を表すにもあるべし。

(同書 P.251)

と述べ、ケリがキの「存在態」または「継続態」であること、転じて「時に関せず専道理にかかること、動くまじき事の意を強むる」用法があり、それがケリの用法の半分を占めることを説明している。ただし、後者の用法は「過去の形式」に共通する転義であり、「されば『キ』も『我誤レリ。サナリキサナリキ』など理にかけて、しかも感嘆的に用ゐらるるなり(同書 P.251)」としてケリだけでなくキにも認めている。

山田1908はそれまで「過去」を表わすとされてきたキを、「こは過去をあらはすといふよりも、過去時にありし出来事を心内に回想したるその回想作用を言語にて発表したるものなり(同書 P.409)」と主張した。ケリについては『『き』と『あり』とが熟合してなれる『けり』といふ一種の複語尾あり』としたうえで、

「けり」は「き」と等しく回想をあらはすに用ゐらるるが故に、往々「き」の代理をなすことあり。然れども、その間に差異は明に存す。即「けり」は啻に回想するのみならず、必現実を基本として、これによりて回想を起すなり。この故にまま喟嘆の「けり」などと称せらるるものあり。かかる意義を語源的にいへば「けり」の「あり」は基本を現実に立てしむるものにして「き」は回想をあらはす、所謂果を見て因を思ふものなり。即過去を回想して断定を今に下す意あるなり。これを俚言に訳すれば「き」は「た」「けり」は「たわい」「たことぢや」などにあたるなり。(同書 P.410~411)

と述べた。キは単なる「回想」、ケリは「現実を基本とし」た「回想」であるというのである。「俚言」の訳語からは成章1778などの影響がうかがわれる。

山田1936も前掲書と同様の説明であるが、

上述の「き」「けり」の二は回想する意をあらはせり。回想とは思ひ起すことなり。過去に経験せしことを「あであつた」「かうであつた」と思ひ出すことなり。而して、人は経験以外の事は回想しえざる筈なり。(同書 P.348)

以上の如くなれば、吾人の「き」「けり」の如きものも亦、厳密にいへば、一旦経験を經たるものにあらざば、これにていひあらはすことを得べきものにあらざして、経験以外の事はいかに過去の事たる事が明確なりとも「き」「けり」にてあらはしうべきものにあらざる筈なり。(同書 P.350)

と述べている点は、いわゆる「歴史的現在」という用法説明を退ける文脈中とはいえ、山田氏がケリをも「経験」の「回想」と考えていたことを明確に示すもので、注目される。

松下1930は

「き」「けり」は専ら過去態を表すが、「き」は記述的で「けり」は説明的だ。其れは活用の上から生ずる区別である。「き」は露骨であつて事件を主観化して表し、「けり」は婉曲で事件を客観化して表す。「き」は事件を主観化して表すから、同じ過去の事を云つても自己の確実な記憶として云ふのである。遠い昔の事を述べても傍で見て居つた記憶をそのまま云ふ様な感じを與へる。他人のことを云つても自分のことと同様によく知

つて居る事の様に聞える。「けり」は事件を客観化して表すから記憶の確実不確実などといふ様なことを超越した一般的な客観的の知識を云ふのである。(同書 P.435~436)のように、キを「記述的」「主観的」で「自己の確実な記憶」としていう「過去」とし、ケリを「説明的」「客観的」で「一般的な客観的の知識」をいう「過去」としている。これはキのみに「確実な記憶」の意を認める説の最初のものとして注目される。また、ケリについて「事件が現在であり其の之を知つたのも現在であつても自分が其れを知らなかつた以前からそうであつた事柄として表す場合に使ふことが多い。和歌などの多くはそれだ(同書 P.438)」と述べている点も、いわゆる「気づき」の用法を「心理的過去」として説明しようとしたものとして注目される。

橋本1969は昭和6年の講義草稿であるが、キ・ケリともに「過去」を示す助動詞とし、

「き」の方は、むしろ、事実としてあつた事を示すので、客観性がつよく、「けり」の方は、主観的要素がつよく、低徊するやうな心もちがあるのであらうとおもはれる。(中略)「き」は「来」から出たといふ説はとにかく、「けり」は「来」に助動詞「り」のついたものから出たのではあるまいかと考へられる。語形も等しく(「け」は共に甲類のケ)、意味も、「り」の継続存在の意味と通ずる所があるやうである。印欧語に於て過去の事実を叙述するのに Aorist と Imperfect との二つの形がある。その区別について Jespersen が *Philosophy of Grammar* (276) に述べてゐる事は、「き」と「けり」との区別にかなり似たところがあるまいかとおもふ。(＊筆記一参考になる。この両者はギリシャ語でよく分れてゐる。その区別は then の区別と同じである。「それから」と「その時」と。Aorist は話をどんどん進めてゆく。Imperfect はその時にあつた事情にひつかかつて永々と述べるのである。テンポが違ふと。つまり「き」が Aorist に、「けり」が Imperfect に当るのではないかと思はれる。) (同書 P.386~387)

とその違いを説明している。後半にキが印欧語の Aorist に、ケリが Imperfect に当たると述べているのは、後に鈴木泰氏が主張した説(鈴木①1984)の先唱となるものである。

松尾②1936は、キは「単なる過去」であるが、ケリは「過去の意に加ふるに、感嘆(寧ろ驚嘆)の意を含んで居る」「常に過去の意と感嘆の意とを兼ね有するのが其の本義」であるとする新説を示した(同書 P.653)。これはケリの「過去」の用法と「詠嘆」または「気づき」などとされてきた用法の二種の一つのものとして同時に説明しようとしたものである。

以上、近代以降昭和初期までの代表的な諸家の文法学説におけるキとケリの意味の差異に関する記述を概観した。これらはいずれも諸家の古典に対する広い観察と学理上の洞察からなされたものであると考えられるが、種々の問題点も含んでいる。

第一に、記述の資料となる文献が漠然としている点である。言い換えれば、検証が不可能なことである。また、文語一般での意味・用法の記述を試みているのだとすれば、そもそもそのような試み自体が厳密に言えば不可能であらうと考えられる。第二に、研究者によってキとケリで「主観的」「客観的」が逆になっている(松下1930と橋本1969)点からもうかがえるように、意味記述に論者の印象的評価が認められる点である。論者によって重視する用例(用法)に違いが見られ、そこから意味記述が分れてくるように見受けられるのである。第三に、学理上の要請から実際の現象を過大(小)評価する傾向が認められる点である。特に松尾1936の「本義」という語に象徴されるように、キやケリの意味を一元的なものに見な

し、一つの意味を根本としそれによって種々の用法を説明しようとする傾向が認められる。第一、第二の点については近年は改善されつつあるが、第三の点はまだ広く見受けられる。言語現象として様々な用法が見られる助動詞に「本義」というものを仮定することについては、方法的に十分な検討を経たうえで行なうべきであろう。

3 細江説と春日説一二説対立の源流一

キとケリの意味・機能の差異に関して最も問題となるのは、両者がともに「過去」の事象を表わしていると思われる場合における差異である。これまでのキ・ケリの意味・機能に関する諸説のほとんどは、ケリのいわゆる「気づき」の用法の説明に大部分を費やしており、両者ともに「過去」の事象を表わしている場合の差異について明瞭に説いたものはむしろ少ないのである。

この点について最も明快な説明を与えたのは細江1932である。同書は英語の時制に関する考察を展開したものであるが、そのうち、「第四章 “Past Tense”」において、過去時制に本来「経験回想」と「非経験回想」の二種が存在することを述べ、現代英語ではその区別は失われてしまったが Old English の時代にはまだその区別が語形上残存していたこと、トルコ語ではこうした二種の区別が現在でも語形上「目睹回想」の形式と「伝承回想」の形式としてはっきり区別されていること、ドイツ語でもこの区別がある程度存在していること、等を説明した。そのうえで、

序を以て私は我が国語を熱愛するが故に、暫く我が国語に就いて私の所信を述ぶことを許されたい。私の考に依れば我が国語には古き昔に於いて此兩者の区別が厳然として存在して居たので、「き」は『目睹回想』で自分が親しく経験した事柄を語るもの、「けり」は『伝承回想』で他よりの伝聞を告げるに用ひられたものである。(同書 P. 136~137, 「用ひ」はママ)

という新説を述べ、竹取物語から用例を挙げて自説の適合することを示した。また、後に一部の研究者から反例として挙げられた上代における「話し手にとって体験不可能な遠い過去の表現」にキが用いられた例に関しても、「間接叙法」において「伝達者がその伝達する事件の内容を信じて保証に立つ用意のある時は」ドイツ語・古英語ともに Indicative Mood (直接法=「経験回想」に当たる形式)を用いる場合があることを述べ、

我が国語に於いても同様の用法が存在した。例へば『皇祖の遠き御代にも、おしける難波の国に、天の下治らしめしきと、今の世にたえず言ひつつ、かけまくもあやに畏し』(万葉集、卷廿)。(同書 P.142脚注)

と既に言及している点も注目される。諸言語における現象から古代日本語におけるキ・ケリ両助動詞の差異を推定したものであって、十分な用例の検討を経たものかどうかははっきり示されていない点問題があるが、ユニークな提説であった。

この細江説は、同氏が英語学者であり、英語学書に発表されたこともあって、国語学研究者間に普及するにはしばらくの年月を要したらしい。早くは徳田浄1936(福島1987に拠る)や木枝増一②1938に紹介されているが、広く知られるようになるのは第二次世界大戦後のことである。

春日1942は西大寺本金光明最勝王経平安初期点を調査した結果、

この古点に見えるケリは、時に於ては過去でなく殆ど皆現在に用ゐられてゐる。即ち普通に所謂詠歎の義に用ゐられてあると言つてよい。(用例略) これらは皆仏性・経の徳・因縁等を一般的に説いてあるから、時は現在である。それ故このケリをキと同じに訳しては合はないのであつて、むしろここはケリはなくても概意は通ずるものであり、古来詠歎として「ワイ」と訳し来つたものに相当するとも見られる。殊にこの古点の訓方に於ては、過去の事を述べるには、必ずキ(シ・シカ・シク)を用ゐて、ケリとは明かに区別してゐる。(同書 P.240)

という事実を報告した。そして「ケリといふ語は上代の文献について見るに、過去と解しても通過し得る例はむしろ少ない」ことから、「ケリは原義が過去ではなく、少なくとも過去のやうに用ゐたのはむしろ二次的の意義ではなからうか」として、ケリの語源を「キ(過去の助動詞) + アリ」と考える説に対し、

私はこの語源についてはむしろ「来^キアリ」の方に与するものである。(中略) 即ちケリはキアリであつて、「来」を形式動詞とするときは、動作の過去より継続して今に存在することを表すのであつて、「前カラシ(アリ) 続ケテ今ニアル」の義である。時からいへば動作の初を過去に想定するけれども、今に存在するのであるから現在でなくてはならない。元来アリの融合して出来た助動詞のセリ・ザリ・タリ・メリなどは時は皆現在である。ケリは過去から動作が継続して現在に存在することを表すのを原義と考へることが、語の成立上至当のやうであつて(同書 P.244)

と述べて、ケリの「原義」を「過去から動作が継続して現在に存在することを表す」ことであるとされた。そのうえで、こうした「原義」の用法が転化して「常在必至」や「存在強調」(この一部がいわゆる「詠嘆」「気づき」に当たる)の用法となり、また「継続的存在のタリが、後世過去に変じて行つた」ように、「原義」が「継続的現在」であるケリも「過去」を表わすようになったと推定している。

この春日説は、主に訓点資料と上代の文献におけるケリの用例を中心として、「原義」として考えだされたものであり、現在でも、訓点資料や上代文献を扱う研究者の間では同説の支持者が大勢を占めているようである。

第二次世界大戦後、再開された文法研究の世界で、上述した細江説・春日説は対立しながらお互いに無視し難い有力な説として、多くの場合二説併記や、二説融合の形をとって、認められていた。早くは昭和22〔1947〕年春の国語学会公開講演会で、佐伯梅友氏が『信濃にあんなる木曾路川』から」という講演を行ない、そこでキが話し手の直接目で見た事象を表わしているという説を述べた。その時佐伯氏はまだ細江氏の書を見ていなかったらしいが、講演後に人から知らされたという(前掲福島1987参照)。後の学校文法書編集に際しては細江説を参照し説明に採り入れている。ただし佐伯氏は細江説と同時に春日説も採り入れているのであつて、厳密に言えば二説併記である。

「けり」は「来あり」のつづまってできた助動詞で、前からし続け、または、あり続けて、今にある意を表わすのを原義として、詠嘆にも回想にも用いられるようになったと言われる。したがって、従来のように、「けり」を初めから、回想もしくは詠嘆ときめてかかったのでは、古典の正しい読解がさまたげられることがあることを、注意すべき

である。(中略)さて、この「けり」が回想の意に用いられたとき、同じく回想を表わす「き」とはどういう違いがあるのであろうか。これについては昔からいろいろ考えられているが、

「き」は自分が親しく見たり経験したりしたという気持で語る場合に用いられ、
「けり」は人から聞いたこととして語る場合に用いられる、
という区別が、だいたい見られるようである。実際、古典などを、この気持で読んでいくと非常によくわかることが多い。(佐伯③1953, 森野宗明氏・小松英雄氏・北原保雄氏編『佐伯文法形成過程とその特質』昭和55〔1980〕年三省堂刊に資料として覆刻、P.560～561)

時枝1954もほぼ同様に、細江説・春日説を二説併記的に記述している。

「けり」は、起源的には、過去の助動詞「き」と「あり」との熟合したものとする説、「来」と「あり」との熟合したものとする説がある。「けり」は「あり」の複合した「たり」「り」と同様に、過去に始まった動作作用が継続してある事実の判断に用いられ、その継続が、過去において消滅したか、なほ現在(話手の立場における)に及んであるかによつて、これを回想の助動詞とする説と、現在を表はす説とに分れるが、主要な点は、継続した事実の判断に用いられることであつて、過去に属するか、現在に属するかは、問題でないやうである。(中略)「けり」は「き」が実際に経験した事実の回想に用いられるのに対して、間接に伝聞したことの回想に用いられる。平安時代の物語に、「けり」が多く用いられるのは、それが伝聞した過去の事実を物語るといふ形式に基づいてあるからである。(同書 P.165～166)

このように、細江説は春日説と相並ぶものとしてではあるが、まず、古典解釈や古典教育に関わる分野から受け入れられていったようである。これは、細江説が、古典教育でよく扱われる平安時代の物語や枕草子・徒然草などの解釈に有効であったからであろうと考えられる。細江説を支持する研究者(論文)としては他に桜井1955, 森重1969, 桑原1969, 吉田金彦①1969, 浅野1969, 白石1970, 吉岡①1977a等, 本位田1984, 鈴木②1986, 加藤①1992等, 竹内④1993がある。

ところが、その後訓点資料や上代文献を対象とする国語学研究が隆盛を示すようになると、細江説では例外となる用例が数多く指摘され、春日説が採り上げられるのに比べ、細江説は否定されることが多くなってきている。

例えば、築島1969は

「き」と「けり」とは意味上の相違があつて、「き」は話し手の直接の体験を回想する場合に、又、「けり」は話し手が他者からの伝聞など間接に体験した事柄を回想する場合に用ゐるといはれるが、「けり」の本性は、それが「あり」の要素を含んでゐるものにも現れてゐるやうに、対象の存在に関する表現者の何等かの意識が表現されてゐるものと考へられる。即ち、「き」が、現在とは切離された、謂はば純粹の過去の事柄を回想した表現であるのに対して、「けり」は、その過去の事柄が、何等かの意味で現在まで存続してゐることの表現であると考へられる。「けり」が、時によつて詠歎の意に用いられるといふのも、それまで意識に上らなかつた事柄の存在に始めて気付いたといふことの表現が、詠歎の表現に通ふものと理解することが出来よう。(同書 P.523)

と述べている。この説明自体は明瞭ではないが、この後で

訓読に「ケリ」が僅かしか用ゐられない理由としては、次のやうな理由が考へられる。即ち、漢文の本文自体が、訓読者にとって、明に過去の事実を叙述したものであり、現在の意識とは繋らないものであつた。その場合、「キ」を用ゐることはあつても、「ケリ」を用ゐなければならない必然性は薄かつたのであらう。(同書 P.524)

と述べているところから見ると、細江説を否定しているように読み取れる。

また山口佳紀①1985は、上代の文献におけるキ・ケリの用例を検討して、「古代日本語の過去を表わす形式は、アスペクトを表わす形式から転じたものである(同書 P.518)」と主張するが、その中で山口氏は

ところで、キとケリとの区別について、細江逸記(『動詞時制の研究』一二七頁以下)は、

キ……………目睹回想

ケリ……………伝承回想

の差であるとする有名な説を唱えている。しかし、ケリに関してはともかく、キには、香具山は敵火を惜しと耳梨と相争ひき(相諍競伎)(万一・一三)

音に聞き目には未だ見ず佐用姫が領巾振りき(布理伎)とふ君松浦山(万五・八八三)

のような例があつて、細江説の障害となることは、既に指摘されている。キは、単に過去を表わすとすべきものである。(同書 P.517)

と述べて細江説を明確に否定している。

訓点資料や上代文献において何故細江説の例外となる用例が多く現われるのかについては、私に論じたことがある(加藤①1992, 同⑥1995c)ので詳細は繰り返さない。ただ、言語現象において原則を立てた場合若干の例外が現われるのはしばしば見られることであるから、少数の例外となる用例を示しただけでその原則自体を否定してしまうのは早計である(井上②1985参照)。この場合例外となる個々の用例やそれが集中して現われる文献に何らかの特殊な条件がなかったかどうかを検討する手続きが、実は必要であつたのである。しかし、そうした試みはわずかに認められるに過ぎなかつた(中西④1982, 白藤1982, 藤井①1987, 加藤①1992等)。大勢はこうした例外を無視し得ず、キの意味・機能を、例えば大野②1974

意味は、「き」の承ける事柄が、確実に記憶にあるということである。記憶に確実なことは、自己の体験であるから、「き」は「…だった」と自己の体験の記憶を表明する場合が多い。しかし、自己の体験し得ない、または目撃していない事柄についても用いる。例えば、みずから目撃していない伝聞でも、自己の記憶にしっかりと刻み込まれているような場合には、「き」を用いて「…だったそうだ」の意を表現した(同書 P.1440上段。用例番号注記を省略した。)

のように、「確実な記憶」「確実な過去」といった規定に拡大した(馬淵1964, 廣濱②1969, 長谷川1970, 岩井1970, 田中1970, 大坪②・野田1978, 井上①1983, 同②1985)のである。キに関しては、現在のところ、このような「話し手にとって確実な過去を表わす」といった意味規定が諸研究者のおおよその共通理解になっていると言えよう。

4 物語論とキ・ケリ—竹岡説とその賛否—

昭和38〔1963〕年11月に竹岡正夫氏のケリに関する新説が発表された。

竹岡1963はまず源氏物語地の文におけるケリの用例を検討し、「『けり』使用の部分と使用していない部分との関連から明らかにされる『けり』の本義」として、ケリ使用部分は「物語中の現場からは別掲面・別世界での事象が『あなたなる』世界での事象として認識され、叙述されている」という共通点を持つとする。それに対してキ使用部分は「物語中の現場」と「同じ一直線でつながっている」「過去の事象であることを表わしている」とする。そのうえで、竹岡氏は、このケリの「本義」が地の文の他の「『過去』『回想』と称されている『けり』『伝承回想』『非経験の回想』などと称されている『けり』」にも認められること、ただそれが物語の現場と「あなたなる場」との関係によって種々の意味・用法となって生じているに過ぎないと解釈できることを述べた。

次に竹岡氏は会話詞・心中詞・和歌・随筆・日記における「けり」の、「一般的・真理的事象としての叙述」「『あなたなる』場の事象としての叙述」「自己を客観化し、反省し、現実の自己から距離をおいて観照的に叙述する場合」「今まで気付かなかった事象を今になって初めてそれと気付いたというような認識のしかた（詠嘆）」等種々の用法に触れ、それらにおいてもケリの「本義」は同様に認められると主張した。

この竹岡説に対し、翌年五月号の同誌に六氏の批評論文（春日和男①1964、木之下1964、中西②1964、根来①1964、原田③1964、北条④1964）が掲載された。諸氏はいずれも竹岡説における「本義」はケリが本来的に有している意味・機能自体ではなく、その派生的機能を説明したものとし、「本来的意味」は別だとして、各々自説を展開している。

対して竹岡氏は竹岡③1968の注1や竹岡④1970において諸氏の「本義」の意味の誤解や主観的な文学鑑賞的研究法について反論しているが、期間があいたこともあってか論争は発展しなかった。ただし、ケリの意味についてのこの一連の論文は多くの研究者の注目を引いたらしく、特に片桐①1969や春日和男②1970a、同③1970bなどを介して、物語論や説話文学研究の分野へ普及していったようである。

竹岡説については、中西②1964も述べるように、物語の地の文という、それ自体としては「主体（話し手、語り手、又は書き手）」・「場面（聞き手、又は読み手も含む）」・「素材（話、又は物語の内容）」という言語の存在条件三者やそれら相互の関係（時枝誠記氏『国語学原論』、昭和16〔1941〕年岩波書店刊、参照）が不明なものを第一の対象として、キやケリといった助動詞の意味・機能を解明しようとしたこと自体が、方法として本末転倒であったと考える。まずこうした三条件が明らかな会話場面等を対象に検討を行ない、しかる後に得た仮説で、こうした条件の不明な地の文の用例をも説明することが可能か否か試みるのが、あるべき順序であろう。

また、竹岡説も含め、これらのケリに関する論文では、「本義」とか「本来的用法」「語源」等がキーワードとなっている。繰り返しになるが、ある助動詞について「本義」というものを設定するには研究方法上の有効性が検討されたいうえでなくてはならない。少なくとも、これらを読む限り何がケリの「本義」であるかという議論は結局決め手のない不毛なものに

終っている印象が強い。(なお、竹岡氏は後に自身の「本義」という用語に関して、六氏の言う「語源的な意味」や「金科玉条の根本原理」ではなく、「各時代・各作品毎に共時論的に、各種の様式や文体などを考慮した上で抽象される、その語の表わしている認識のしかたそのもの」を指して言ったのだと述べ、誤解されたと反論している(竹岡③1968注1)が、竹岡①1961を抜きにして竹岡②1963だけを読む限り、六氏の「誤解」も仕方のないことだという印象を受ける。)また、「語源」論において真に客観的(せめて相互主観的)に証明され確定された「語源」に拠るのでなければ、そこから演繹的に語の意味を規定するのは危険であろうし、特に対象が概念的な意味を有するのではない助詞・助動詞のような語である場合、「語源」から直接それらの意味を規定できるかどうかは疑問である。「本来の用法」というのも、現在残されているものとして上限である上代の文献自体が韻文等ジャンルとしてはごく限られたものであり、それらのみからケリのどのような用法が「本来的」かを言うには危険が大きい。

以上、これらの用語に象徴されるケリの意味の研究は方法上多くの問題を含んでいる。キ・ケリに関して、確実な「語源」を究明したりどの用法が「本来の用法」かを解明したりすることは現存する文献からではほぼ不可能だと考えられる。そのため、こうした方向からキ・ケリの意味・機能の差異を明らかにしようとすることもおそらくは不可能であろう。現在の研究者に可能なのは、残された文献の用例の全てを検討し、その用法を帰納し、その多寡を報告し、そしてそれにとどまることであると思う。その意味で後述する吉岡①1977a等の調査方法は、その結果の文学研究への応用は別として、見習うべきものであると考える。

5 吉岡・糸井論争

吉岡①1977a、同②1977b、同⑤1978aは、源氏物語におけるキとケリのはほぼ全用例を資料としてその意味・用法を記述したものである。吉岡氏は当初キが「目睹回想」、ケリが「伝聞回想」または表現主体の「気付き・確認」を表わすという通説から、これを源氏物語の「草子地(作者・語り手と思われるものが物語の表面に出て直接発言している部分)」識別の客観的なメルクマールとして利用できるのではないかと考えた。しかし、キとケリの意味に関して先の通説は未だ研究者間に共通理解が得られていないのを知るに及び、結局自身で最低限必要な源氏物語における両者の意味・用法を調査・確認するより仕方がないとして、試みたものであるという。

吉岡氏は、調査の方針として

- 一、用法の分類を目的とし、「本義」その他にわたらない。
- 一、調査範囲は源氏物語に限定する。
- 一、源氏物語の全用例を対象とする。
- 一、「き」「けり」のそれぞれについて、会話・心内語・和歌・消息文の用例と地の文の用例とを別々に考察する。(吉岡⑩1996から引用、P.22)

という四項を立てた。第四項は中西②1964の指摘に従ったという。

キについて、会話等の用例では、「一九三〇例中二二例ないしは五例を除いた残りのすべてが(話し手の直接、加藤補)体験の回想であった(P.34)」という。地の文については独

自に分類・記述を試みているが、方法上問題があると考えるのでここでは触れない（以上吉岡④1977 a）。

ケリについては、まず、会話等の用例を、

A 気づきないしは確認の「けり」（九二四例）

B 非体験ないしは不確実な事柄を回想する「けり」（三三七例）

B 1 故事・伝説・伝承を表現する「けり」（六〇例）

B 2 非体験の伝聞した事柄を回想する「けり」（一七九例）。これはさらにイ（一六六例）、ロ（一三例）の二類に細分しうる。

B 3 非体験ないしは不確実な事柄を推定して回想する「けり」（九八例）

C AともBとも両様に解釈される中間的な「けり」（七二例）。これもC 1（四三例）、

C 2（二九例）の二類に細分しうる。

D 若干の注意すべき用法（五九例）

(P.109)

と分類して考察した。その結びで、ケリに「気づき・確認」と「伝聞回想」という意味的に隔たった二つの用法が存在するのを、「気づき・確認」の用法であるAの用例から中間的なC 2→C 1そして「非体験ないしは不確実な事柄を回想する」B 2ロ→B 2イ→B 1の用例へと並べ、「伝達の経路が、当面の対話者→特定の第三者→不特定の第三者と次第に抽象化するにつれて、『伝聞』という要素が強まっていく（同書P.150～151）」ことを示し、両用法を実際の言語現象によって橋渡しすることを試みている点、また、すべてのケリの用例に「体験外」という要素が認められると言及している点が注目される（以上吉岡②1977 b）。地の文の用例についてはやはり問題があると思われるので、その独自の分類（吉岡⑤1978 a）には触れない。

以上述べた吉岡氏の一連の論文については、もっぱら用例の用法別分類とその記述説明に終始している点、ほぼ全用例を対象に分類した各用法ごとに数値を示し、かつ他者によって検証可能な形で提示した点、ケリの「気づき」と「伝聞回想」の二用法を実際の用例によって橋渡しできることを示した点など、参考とすべき部分が多い。ただし、物語の地の文の用例分類については、前述したように、それらの表現の「主体」「場面」「素材」及びそれらの関係が基本的には不明な場合が多いはずであり、個々の用例については、厳密には判断不能とせざるを得ないものが多いと思われる。吉岡氏は、漠然と「光源氏ないしは紫上に近侍した女房（P.35）」を仮に「語り手」と設定したうえで分類を試みているが、こうした設定は、少なくとも「話し手が直接体験した事象を表わす」か否かという基準で用例を分類する場合には一種の循環論に陥る危険性を含んでいると考えられる。キ・ケリ以外の、例えば記述内容などから明確に語り手が設定できない場合には、こうした分類は行なうべきではないと考える。

この吉岡氏の一連の論文に対しては、特にそのキの意味・用法をめぐる、糸井通浩氏に批判（糸井③1981）がある。

糸井氏は、キの意味について、前稿（糸井②1980）の結論を示したうえで通説の「体験の回想を表わす」という点に疑問を提出し、いくつかの反例を示しながら、「現在の状態（心）とは異質な状態になってしまった部分をあえて過去のこととして切り離し、現在と対立的に捉える（P.111）」という点をキの「本義」とする。ケリについては、竹岡②1963や原田④

1970にほぼ掘りながら、源氏物語の地の文におけるキ・ケリの使用も、「進行中の物語現場については、語り手の現在からみて『けり』で認識されるが、その物語中の現場からみてその時点から隔絶した時のこととして認識しなければならないときに、そういう隔絶した時のことを『き』で認識している（P.128）」のであり、「体験非体験の識別において使い分けられているのではな（P.129）」いと主張する。

糸井氏はこの他にも吉岡氏に対し種々批判を試みているのだが、キとケリの差異に関しては上述したようにまとめられると思う。なお、糸井氏の批判は糸井④1987にも繰り返されている。

この批判に対し、吉岡氏はほぼ十年後、吉岡⑨1991で解答した。本稿で簡単にまとめた批判部分に関しては、

私は、糸井氏が和歌の用例を対象にして、たとえば「あるものごとの、A時のA状態とB時のB状態とが異質なものと認識されるとき、B時を基点にしてA時をB時から切り離して（つまり「過去時」として）認識されていることを示す助動詞が「き」であった」（一三四頁）と「き」の機能を抽出されたのを、それが「き」の本義ないしは第一義的用法か否かはともかくとして、そういう機能が「き」にあることを認めるのにやぶさかではない。しかし同時に、氏が対象とした和歌の用例のすべてが詠者の体験の回想であること、源氏物語の会話文等の用例の九九パーセント弱までが話者の体験の回想であることも、私にとっては大切な現象である。（吉岡⑩1996より引用、P.91）

と述べている。また、別に糸井氏のいうキの「本義」についての疑義も提出している。

この吉岡・糸井両氏のキをめぐる論争はこれ以上進展しなかった。これは、期間があいたこともあるが、二人とも（源氏）物語研究の一手段としてキに着目したに過ぎず、論点の中心がキの意味でなく「草子地」等物語の地の文の表現性の方であったためであろう。ただ、両者の論争から感じられるのは、吉岡氏のようにある文献について何等かの基準によって全用例を分類調査してゆく方法により、検証可能な形で、例えば会話文等では99パーセント弱の用例が「話者の体験の回想」を表わしていた、という結果を示されると、もはやそれを否定するのは難しいということである。これは逆に言えば、一つ一つの文献について地道に調査を積み重ねて行くことが、多くの研究者をしてある種の共通理解に至らせるための最も容易な方法であり得るということである。

6 揺れ動く鈴木泰説

近年鈴木泰氏は精力的に古代語のテンス・アスペクトの問題に取り組み、次々と研究成果を発表してきた。キ・ケリの意味の差異に関しても、いくつかの論文を発表しているが、それらには、研究方法についても、得られたキ・ケリの意味・機能の記述についても、動揺が認められる。

鈴木①1984はもっぱら細江1932を批判したものである。第一に、同説に拠った吉岡①1977 a等・桜井1955・白石1970の用法分類を検討し、そこに細江説では説明できない用法が存在することを指摘する。第二に、橋本1969・斎藤②1981・原田①1955等・山岸1930を紹介し、キ・ケリの差異を印欧語のAoristとImperfectの差異に相当するという説を提出し、そう

考えようまく説明できるキとケリの違いとしてテキストの意味を採り上げ、テンポの違いや浮き彫り付与、さらには竹岡②1963の論ずるケリの「あなたなる場の事象」の表現に触れている。第三にはケリの諸説、第四にはキの諸説を概観し、細江説で問題となる点、自説でうまく説明できる点をいくつか挙げている。

鈴木②1986になると変化する。方法としては形態論の立場から日本語動詞のテンスを扱った鈴木重幸や高橋太郎等に拠り、動詞の「基本形」と「過去形」について、落窪物語の会話文を資料として考察している。動作動詞・状態動詞という動詞の別に留意し、「アクチュアルな現在」とそうでないものを区別するなど、現代日本語のテンス・アスペクト研究の研究成果を分析に採り入れている。また、キ・ケリの「ムード」上の区別については、

かくして、更に考えるべき例外はあるものの、〈キ〉が直接的に認識された事実を表すのに対して、〈ケリ〉は何らかの方法によって後に間接的に認識された事実を表すものと言って誤りではないだろう。(中略)ところで、鈴木泰《一九八四》では、アスペクト的な完了・未完了の違いを〈キ〉〈ケリ〉の最も基本的な違いと考えて、ムード的な違いをそれから発生するものと考えたが、事実は逆で、認識の直接性、間接性というムードの違いの方が本質的で、アスペクトの違いはそれにまつわって現れるものと考えべきであった。

と述べて、前稿の説を訂正している。ただし、地の文についてはキ・ケリを経験・非経験と見なしてよいか保留している。

ところが同年10月の鈴木③1986では、

ここで〈ツ・ヌ・タリ・リ〉を用いて表される過去の事実も殆どが話し手の直接的に認識した事実であることに思い至るなら、〈キ〉形にとって直接的に認識されたことを表すという特徴は、本来それほど重要なものではないということになる。(P.111)

ここでは、〈キ〉形と〈ケリ〉形のテンス的用法は、同じく現在から切り離された過去の事実を表しながら、それが特定の時に起こったことか、確とは特定できない時に起こったことかを表すという点で異なるものと一先ずは考えておきたい。(P.116)

と述べ、再びキ・ケリの対立点を体験・非体験という「ムード的な意味」の点からでなく「特定の過去の事象」か否かという点から説明しようとしている。

これ以後も鈴木氏の細江説に対する評価にはやや動揺が見られるのだが、鈴木⑦1992以降会話文についてはキの「体験回想」をほぼ認めているようである。

鈴木氏は、キ・ケリを切り離して比較するのではなく、上接用言とともに「～キ形」・「～ケリ形」として比較する。また、この二者だけでなく、動詞の「基本形」やツ・ヌ・タリ・リのついた形も含めて、すべてを「テンス・アスペクト」に関わる形態として比較考察する。さらに、会話文等における用法と、物語などテキストにおける用法を区別して考察している。これらの点で同氏の研究は方法上従来のキ・ケリ研究とは異なっている。現代日本語研究における動詞のテンス・アスペクト研究の成果をここまで本格的に古代日本語に応用したのは鈴木氏が初めてであろう。ただし、現代日本語におけるテンス・アスペクトの体系が古代日本語と必ずしも全同でない以上、これらの形態を一律に比較考察すべきかどうかについてはもう少し検討すべきだったのではないかと考えられる。例えば、ケリは「語につくのではなく思想につく」とした根来①1964の発言や、キ・ケリが「副詞+動詞」の意味を変

えずについて特殊未来の過去（「～シテシマオウトシタ」に当たる、過去の時点における未来）を表わす点から、

現代語は平安時代語の一般過去に相当する過去のみで、その表現形式も過去形という活用形で一語である（と認めうる）のに対し、平安時代語は、一般過去と特殊未来の二種類の過去があり、その表現形式も、一語でなく、「現在未来の表現形式」に「き」または「けり」が接続したものである。現代語との差異を、もっと簡単に言えば、

平安時代語には特殊未来が存在し、過去の表現形式は一語とは認められない。

ということになる。

と述べた桜井②1978の考察を参照すると、これらすべてを一律に比較考察することは異なるレベルのものを同時に扱うことになりはしないかと恐れる。（なお、加藤⑤1995、同⑧1996では、キとケリの上接語について、「認識の仕方」に関わる要素以外には明瞭な相違が見られなかった。この点ツ・ヌ等とキ・ケリとは異なっている。）

鈴木氏がテンス・アスペクトの観点からキ・ケリがどのような機能を果しているかを明らかにしたのは確かであるが、そこから直接キ・ケリの区別が体験・非体験によるのか否かについて判定を下すことはできないと考える。両者は別のレベルの問題である。鈴木氏にこの点で動揺が見られるのも、両者を別の問題として扱わず、混沌とした状態で扱ったためではなかろうか。

結 残された問題点

以上代表的なキ・ケリ研究について概観した。最後に現在の研究状況において残されている問題についてまとめておきたい。

第一に、現在でも「本義」などといった意義素のようなものでキ・ケリの全用法を説明しようとする試みが見られるが、もう一度、そうした説明の方法が真に有効か否かを検討してみる必要があるだろう。

第二に、細江説に対する反例提示に見られたように、他説を否定する論拠について、説得力のないものが多い。万葉の大和三山歌を示して、「詠者の目撃不可能な事実がキで表現されているから、細江説は成り立たない」などというが、作者即「詠者」としてよいか、また、これを通常日用の言語表現と同列に扱ってよいか、など、反論の可能性はいくらでもある。他説の否定には相当の説得力が必要であろう。

第三に、単にキ・ケリの意味・機能といっても、日常会話におけるものと、和歌におけるもの、物語や日記の地の文（テキスト）などにおけるものとは差異があるはずである。従来の研究の多くはそれらを細かく区別していなかったが、今後はこれらを厳密に区別して考察すべきであろう。順序としては、会話→和歌→テキストが望ましいであろう。

第四に、キ・ケリの意味の差異を考察するのに、キとケリだけを対象とするのか、鈴木泰氏のように動詞のテンス・アスペクトを表わすすべての形態のパラダイムの中で考察するののかという点も問題となる。方法上はどちらも可能であろうが、何故その方法を採用するのかという根拠を明確にしておかねばならないであろう。

最後に、古代語を扱う限り、そこに通時的な問題と、（文献・方言）資料の制約と、現代

人には所詮理解できないはるかな世界の問題であるという障害がある。これらについても細かい配慮が必要であろう。他言語の研究成果も参照すべきではあるが、最終的に実証の決め手となるのは古代日本語の現に残されている資料である。(了)

キ・ケリ研究文献目録（*印は未見）

近代以前

1778（安永7）

富士谷成章 『あゆひ抄』（風間書房版『富士谷成章全集上巻』所収）

1785（天明5）

本居宣長 『詞玉緒』（筑摩書房版『本居宣長全集第五巻』所収）

明治・大正時代

1889（明治22）

大槻文彦① 「語法指南」（『言海』所収）

1890（明治23）

* 落合直文・小中村義象

『中等教育日本文典』（博文館）

1891（明治24）

* 関根正直 『国語学』（六合館）

1897（明治30）

大槻文彦② 『広日本文典』『広日本文典別記』（私家版，1月，勉誠社版複製）

1899（明治32）

* 小神野芳太郎 「きし助動詞活用弁」（『国学院雑誌』5の5・6，3・4月）

1901（明治34）

草野清民 『草野氏日本文法』（富山房，勉誠社版複製）

1907（明治40）

三矢重松① 『高等日本文法』（明治書院，9月）

1908（明治41）

山田孝雄① 『日本文法論』（宝文館，9月）

1912（明治45）

吉岡郷甫 『文語口語対照語法』（光風館，7月）

1925（大正14）

* 松岡静雄 『通俗文法講話』（国語書院）

1926（大正15）

* 吉沢義則 『中等新国文典別記』（修文館）

昭和初期（元～20）

1927（昭和2）

小林好日① 『国語国文法要義』（京文社，2月）

1928（昭和3）

執筆者不明 『校註日本文学大系25』（誠文堂新光社，6月）

- * 松尾捨治郎① 『国文法論纂』
- * 安田喜代門 『国語法概説』(中興館)
- 1929 (昭和4)
 - 木枝増一① 『高等国文法講義』(東洋図書, 6月)
- 1930 (昭和5)
 - 松下大三郎 『改撰標準日本文法』訂正版(中文館, 4月, 勉誠社版複製)
 - * 今泉忠義① 「助動詞『き』の活用形『し』の考」(『国学院雑誌』36の10, 10月)
 - * 吉田新造 『日本文法』(京都女子高等専門学校出版部)
- 1932 (昭和7)
 - 細江逸記 『動詞時制の研究』(泰文堂, 2月)
 - * 三矢重松② 『国文学の新研究』(中文館)
 - * 湯沢幸吉郎① 『概説日本文法』
 - * 今泉忠義② 「助動詞『き』の連体形」(『金沢博士還暦記念東洋語学の研究』, 12月)
- 1933 (昭和8)
 - 新井無二郎 『国語時相の研究』(中文館, 1月)
- 1935 (昭和10)
 - * 小林好日② 「過去辞の学説史」(東北帝国大学法文学部『十周年記念史学文学論集』所収, 6月)
- 1936 (昭和11)
 - 山田孝雄② 『日本文法学概論』(宝文館, 5月)
 - 松尾捨治郎② 『国語法論攷』(文学社, 9月)
 - * 徳田 浄 『国語法査説』(文学社)
- 1937 (昭和12)
 - * 糸井善太郎 『万葉集語法私論』(私家版)
- 1938 (昭和13)
 - 木枝増一② 『高等国文法新講品詞篇』(東洋図書, 11月)
- 1940 (昭和15)
 - * 山岸徳平① 「古典の論理的解釈と日本文法学の再吟味」(『皇朝文学』, 3月)
- 1941 (昭和16)
 - * 小林好日③ 『国語学の諸問題』(岩波書店)
 - * 堀 重彰 『日本語の構造』(畝傍書房)
- 1942 (昭和17)
 - 春日政治 『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』(岩波書店, 12月)
- 昭和20~35年
- 1947 (昭和22)
 - * 佐伯梅友① 「『信濃にあんなる木曾路川』から」(『国語学会会報』7, 11月)
- 1948 (昭和23)
 - * 佐伯梅友② 「いわゆる詠嘆の『なり』について」(『国文研究』1, 6月)
- 1953 (昭和28)
 - 佐伯梅友③ 『国文法高等学校用』(三省堂)
 - * 長船省吾 「助動詞けりの用法について」(『美作短大研究紀要』1)
- 1954 (昭和29)

- 時枝誠記 『日本文法文語篇』(岩波書店, 4月)
- 1955(昭和30)
- 亀井孝① 『概説日本文法』(吉川弘文館, 3月)
- 原田芳起① 「上代日本語動詞の時について 通時論的な一二の問題」(『樟蔭文学』7, 10月)
- 桜井光昭① 「回想の助動詞の用法」(『国語学』23, 12月)
- 1956(昭和31)
- 阪倉篤義① 「竹取物語における『文体』の問題」(『国語国文』25の11, 11月)
- 島田良二① 「三十六人集諸本と系統」(『国語と国文学』33の11, 11月)
- 1957(昭和32)
- 原田芳起② 「語法と文体」(『樟蔭文学』9, 10月)
- 1958(昭和33)
- 国田百合子 「助動詞『し』の用法—記紀歌謡を中心として」(『文学・語学』7, 3月)
- 山岸徳平② 「補注3」(岩波古典文学大系『源氏物語1』所収, 1月)
- 1959(昭和34)
- 湯沢孝吉郎② 『文語文法詳説』(右文書院, 11月)
- 1960(昭和35)
- 島田良二② 「雅平本業平集の詞書の検討」(『国語と国文学』37の7, 7月)
- 昭和36~50年
- 1961(昭和36)
- 竹岡正夫① 『富士谷成章全集上巻』(風間書房, 3月)
- 1962(昭和37)
- 田辺 爵 『徒然草諸注集成』(右文書院, 5月)
- 1963(昭和38)
- 中西宇一① 「助動詞『けり』の間接性」(『女子大國文』30, 6月)
- 竹岡正夫② 「助動詞『けり』の本義と機能—源氏物語・紫式部日記・枕草子を資料として—」(『国文学言語と文芸』31, 11月)
- 1964(昭和39)
- 春日和男① 「助動詞『けり』の二面性—竹岡説に思う—」(『国文学言語と文芸』34, 5月)
- 木之下正雄 「『けり』について」(同上)
- 原田芳起③ 「助動詞『けり』の意味—竹岡氏の提説をめぐって—」(同上)
- 根来 司① 「助動詞『けり』の表現性」(同上)
- 中西宇一② 「助動詞『けり』の意味について—竹岡正夫氏の論に対する反論として—」(同上)
- 北条忠雄① 「成立から見たケリの本義—竹岡説の直接的批判にかえて—」(同上)
- 亀井孝②・大藤時彦・山田俊雄編
『日本語の歴史3 言語芸術の花ひらく』(平凡社, 4月)
- 馬淵和夫 「助動詞『キ』と『ケリ』の区別はなんとみるべきか」(『国文学解釈と鑑賞』29の10, 10月)
- * 廣濱文雄① 「過去(回想)・完了の助動詞」(『国文学解釈と教材の研究』9の13)
- 1965(昭和40)
- 山崎良幸① 『日本語の文法機能に関する体系的研究』(風間書房, 12月)
- 1968(昭和43)

- 大野 晋① 「日本人の思考と述語様式」(『文学』36の2, 2月)
- 伊藤慎吾① 「源氏物語の助動詞キ, ケリの用例(上) —用例を究明して, その相違を考察する—」(『武庫川女子大学紀要』15, 3月)
- 竹岡正夫③ 「古今和歌集における助動詞『けり』の用法」(『香川大学教育学部研究報告(第一部)』23, 11月)
- 堀田要治① 「日本語の助動詞の役割・記憶(き・けり・た)」(『国文学解釈と鑑賞』33の12, 12月)
- 1969(昭和44)
- 森重 敏 「『けり』の意味分化—その現実性と真実性と観念性—」(『万葉』70, 1月)
- 小路一光 「万葉集における『き』『けり』の意義・用法」(『早稲田高等学院研究年誌』13, 1月)
- 佐田智明 「あゆひ抄の『けり』について」(『北九州大学文学部紀要』4, 3月)
- 廣濱文雄② 「過去(回想)・完了の助動詞 一き 二けり」(学燈社『古典語現代語助詞助動詞詳説』所収, 4月)
- 伊藤慎吾② 「源氏物語の助動詞キ, ケリの用例(中) —用例を究明して, その相違を考察する—」(『武庫川女子大学紀要』16, 5月)
- 桑原博史 「徒然草における二つの場」(『国語と国文学』46の5, 5月)
- 吉田金彦① 「助動詞小辞典き・けり」(『月刊文法』1の7, 5月)
- 築島 裕 『平安時代語新論』(東京大学出版会, 6月)
- 片桐洋一① 「物語の世界と物語る世界—竹取物語を中心に—」(『国文学言語と文芸』66, 9月)
- 浅野 信 『日本文法語法論』(桜楓社, 9月)
- 橋本進吉 『助詞・助動詞の研究』(同博士著作集8, 岩波書店, 11月)
- 後藤和彦① 「時間性と言語—助動詞の組織を中心として—」(『国語国文』38の12, 12月)
- 1970(昭和45)
- 長谷川清喜 「語法と文体—古今集—詞書のキ・ケリの用法から」(『月刊文法』2の3, 1月)
- 春日和男② 「助動詞『ケリ』の論の終着駅—『源氏物語』桐壺の巻説話論—」(『月刊文法』2の4, 2月)
- 岩井良雄 『日本語法史奈良・平安時代編』(笠間書院, 3月)
- 北条忠雄② 「いわゆる『過去の助動詞』とは」(『月刊文法』2の7, 5月)
- 小池清治 「助動詞『き』の接統—その変則性の由来について—」(同上)
- 吉田金彦② 「『降りにせば』と『枕かずけば』—語史的にみた『き』の活用—」(同上)
- 原田芳起④ 「『けり』の変遷—活用を中心として—」(同上)
- 竹岡正夫④ 「『けり』と『き』の意味用法」(同上)
- 山崎良幸② 「『き』『けり』の研究上の争点」(同上)
- 田中喜美春 「和歌における『き』『けり』」(同上)
- 石沢 胖 「『き』『けり』と古文学習」(同上)
- 白石大二 「『徒然草』における助動詞『き』『けり』—表現の真実の理解のために—」(同上)
- 春日和男③ 「助動詞『き』と『けり』の論への回想」(『月刊文法』2の8, 6月)
- 根来 司② 「『けむ』と『けり』の関係」(同上)
- 伊藤慎吾③ 「源氏物語の助動詞キ, ケリの用例(下) —用例を究明して, その相違を考察する—」(『武庫川女子大学紀要』17, 8月)

- 中西宇一③ 「助動詞」(『月刊文法』3の1, 11月)
 後藤和彦② 「『たり』と『けり』の関係」(『月刊文法』3の2, 12月)
- 1971 (昭和46)
 *芳賀 綏 『古典文法教室』(東京堂)
 *小松光三① 「王朝語にみる時間認識」(『王朝』2)
- 1972 (昭和47)
 古関吉雄 「屈折断定の助動詞『なり』と追認過去の助動詞『けり』と」(『明治大学教養論集(日本文学)』75, 12月)
- 1973 (昭和48)
 吉田金彦③ 『上代語助動詞の史的研究』(明治書院, 3月)
 此島正年 『国語助動詞の研究—体系と歴史』(桜楓社, 10月)
- 1974 (昭和49)
 阪倉篤義② 『改稿日本文法の話』(教育出版, 3月)
 大野 晋② 「基本助動詞解説」(『岩波古語辞典』所収, 12月)
- 昭和51～平成8年(現在)
- 1976 (昭和51)
 山口明穂① 『中世国語における文語の研究』(明治書院, 8月)
 門出順子 「蜻蛉日記上巻の成立に関して—『日記』及び『けり』表現の問題」(立教大学『日本文学』37)
- 1977 (昭和52)
 糸井通浩① 「『なりけり』語法の表現価値—『桐壺』『若菜下』を中心に—」(『国文学解釈と教材の研究』22の1, 1月)
 根来 司③ 「源氏物語の表現と語る文」(同上)
 竹内美智子① 「助動詞」(『岩波講座日本語7文法II』所収, 2月)
 吉岡 曠① 「源氏物語における『き』の用法」(笠間書院『源氏物語を中心にした論放』所収, 3月)
 吉岡 曠② 「源氏物語における『けり』の用法一」(『学習院大学文学部研究年報』23, 3月)
 吉岡 曠③ 「源氏物語の語り手と書き手と朗読者と」(『国語国文』46の3, 3月)
 吉岡 曠④ 「源氏物語の遠近法」(『文学』45の4, 4月)
 大坪併治① 「説話の叙述形式として見た助動詞キ・ケリー訓点資料を中心に—」(『国語学』111, 12月)
- 1978 (昭和53)
 吉岡 曠⑤ 「源氏物語における『けり』の用法二」(『学習院大学文学部研究年報』24, 3月)
 吉岡 曠⑥ 「竹取物語から源氏物語へ—『き』『けり』の用法を中心として—」(学習院女子短期大学『国語国文論集』7, 3月)
 大坪併治②・野田美津子 「説話の叙述形式として見たキ・ケリー今昔物語を中心に—」(『大谷女子大國文』7, 3月)
 桜井光昭② 「平安時代語の時の表現」(『国語学』112, 3月)
 斎藤 博① 「日本語動詞のテンスとアスペクト(1)」(『東京成徳短大紀要』11, 4月)
 松尾捨治郎③ 『萬葉集語法研究助動詞編』(笠間書院, 7月)
 吉岡 曠⑦ 「落窪物語の物り手」(笠間書院『論叢王朝文学』所収, 12月)

- 1979 (昭和54)
- 吉岡 曠⑧ 「物語の冒頭」(『学習院大学国語国文学会誌』22, 3月)
- 片桐洋一② 「古今和歌集の場(上)」(『文学』47の7, 7月)
- 辻田昌三 「物語る『けり』」(『島大國文』8, 9月)
- 1980 (昭和55)
- 小松光三② 『国語助動詞意味論』(笠間書院, 11月)
- 糸井通浩② 「古代和歌における助動詞『き』の表現性」(『愛媛大学法文学部論集文学科編』13, 12月)
- 1981 (昭和56)
- 斎藤 博② 「日本語動詞のテンスとアスペクト(2)」(『東京成徳短大紀要』14, 3月)
- 糸井通浩③ 「源氏物語と助動詞『き』」(風間書房『源氏物語の探究』6, 8月)
- 大坪併治③ 『平安時代における訓点語の文法』(風間書房, 8月)
- 北原保雄 『日本語助動詞の研究』(大修館, 11月)
- 小松光三③ 「『ななり』『なめり』『なりけり』の意味機能」(『愛媛国文研究』32, 12月)
- 1982 (昭和57)
- * 鶴田常吉 『日本文学』(国書刊行会)
- 中西宇一④ 「動詞性述語の史的展開(2)態(アスペクト)・時(テンス)」(明治書院『講座日本語学2 文法史』所収, 4月)
- * 山口明穂② 「日本古典文学の再評価 文学と語学と—源氏物語の語法」(『武蔵野文学』30, 11月)
- 亀井 孝③ 「エウジェニオ・コセリウの学説—言語学史のながれにそって—」(『成城文芸』102, 11月)
- 桑田 明 「『ぬ』『つ』四考『き』『けり』再考」(『就実語文』3, 11月)
- 白藤礼幸 「古代の文法I」(大修館『講座国語史4 文法史』所収, 12月)
- 1983 (昭和58)
- 斎藤 博③ 「日本語動詞のテンスとアスペクト(3)」(『東京成徳短大紀要』16, 3月)
- 井上親雄① 「西方指南抄における助動詞—『キ』と『ケリ』—」(武蔵野書院『鎌倉時代語研究』6, 5月)
- 近藤泰弘 「過去」(明治書院『研究資料日本古典文学⑩ 文法付辞書』所収, 7月)
- * 堀田要治② 「徒然草の解釈文法」(至文堂『時代別作品別解釈文法』所収)
- 1984 (昭和59)
- 深津陸夫 「勅撰和歌集の詞書における『き』と『けり』」(名古屋大学出版会『後藤重郎教授停年退官記念国語国文学論集』所収, 4月)
- 竹内美智子② 「助動詞の分類」(明治書院『研究資料日本文法6 助辞編(二)助動詞』所収, 5月)
- 本位田重美 『日本文法講話』(和泉書院, 5月)
- 鈴木 泰① 「『き』『けり』の意味とその学説史」(『武蔵大学人文学会雑誌』16の3, 12月)
- 1985 (昭和60)
- 山口佳紀① 「時制表現形式の成立(下)—キとケリをめぐる—」(有精堂『古代日本語文法の成立の研究』所収, 1月)
- 井上親雄② 「東寺観智院本三宝絵詞に於ける『キ』と『ケリ』」(武蔵野書院『鎌倉時代語研究』8, 5月)
- 1986 (昭和61)
- 鈴木 泰② 「テンス」(『国文学解釈と鑑賞』51の1, 1月)

- 竹内美智子③『平安時代和文の研究』(明治書院, 5月)
 鈴木 泰③「古代日本語の過去形式の意味」(明治書院『松村明教授古稀記念国語研究論文集』所収, 10月)
- 1987(昭和62)
 糸井通浩④「物語文学の表現」(有精堂『体系物語文学史第二巻物語文学とは何かII』所収, 2月)
 鈴木 泰④「古文における六つの時の助動詞」(明治書院『国文法講座2 古典解釈と文法—活用語』所収, 4月)
 * 藤井貞和①『物語文学成立史』(東京大学出版会)
 福島邦道「山岸源氏における助動詞『けり』—学説史の中で—」(『実践国文学』32, 10月)
- 1988(昭和63)
 古瀬順一「日蓮消息文における助動詞『き』『けり』の出現傾向について」(立正大学『国語国文』24, 3月)
 山口明穂③『国文法講座別巻 学校文法—古文解釈と文法』(明治書院, 4月)
- 1989(平成元)
 山口明穂④『国語の論理』(東京大学出版会, 3月)
 堀口和吉「助動詞『〜けり』考」(『山辺道』33, 3月)
 吉田茂晃「『けり』の時制面と主観面」(『国語学』157, 6月)
- 1990(平成2)
 鈴木 泰⑤「現代日本語と古代日本語のテンス」(『国文学解釈と鑑賞』55の1, 1月)
 新里瑠美子①「ノート『キ』と『ケリ』の区別をめぐって」(『国文学言語と文芸』105, 1月)
 大木一夫「中世後期の軍記物における『き』『けり』について」(日本文芸研究会『文芸研究』124, 5月)
 川上徳明「『国文法講座別巻』疑義一束」(札幌大学『資料と研究』21, 10月)
 藤井貞和②「『けり』に詠嘆の意味はあるか」(三省堂『高校教育ぶっくれっと』18)
- 1991(平成3)
 金田章宏・奥山熊雄
 「八丈島三根方言 動詞の形態論 過去の『き』をもつテンス形式」(『国文学解釈と鑑賞』56の1, 1月)
 鈴木 泰⑥「古代語文法研究のために」(同上)
 吉岡 曠⑨「『源氏物語における『き』の用法』再論」(学習院女子短期大学『国語国文論集』20, 3月)
 新里瑠美子②「Where Do Temporality, Evidentiality and Epistemicity Meet?—A Comparison of Old Japanese -ki and -keri with Turkish -di and -mis—」(『言語研究』99, 3月)
 山口佳紀②「国語史から見た説話文献—文体史的考察—」(勉誠社『説話の講座1 説話とは何か』, 5月)
- 1992(平成4)
 鈴木 泰⑦『古代日本語動詞のテンス・アスペクト—源氏物語の分析—』(ひつじ書房, 5月)
 加藤浩司④「助動詞キ・ケリの機能—最勝王経古点・三宝絵詞・今昔物語集を資料として—」(和泉書院『日本語論究2—古典日本語と辞書』所収, 10月)
- 1993(平成5)

- 鈴木 泰⑧ 「時間表現の変遷」(『月刊言語』22の2, 2月)
 金水 敏 「古事記のテンス・アスペクト」(『国文学解釈と鑑賞』58の7, 7月)
 竹内美智子④ 「土佐日記のテンス・アスペクト」(同上)
 加藤浩司② 「古代語における文章の『視点』と『体験性』—和泉式部日記におけるキとケリの使用を例として—」(『名古屋大学国語国文学』72, 7月)

1994 (平成6)

- 加藤浩司③ 「蜻蛉日記における助動詞キ・ケリの用法について」(『名古屋大学人文科学研究』23, 3月)

1995 (平成7)

- 加藤浩司④ 「助動詞キ・ケリが示す『体験性』の差異について—付, 大鏡における公事・私事の錯綜—」(『信州大学人文学部人文科学論集』29, 3月)
 加藤浩司⑤ 「上接語・下接語から見た助動詞キ・ケリの差異—品詞レベルでの分析—」(長野県ことばの会誌『ことばの研究』7, 7月)
 加藤浩司⑥ 「法華経訓読における助動詞ケリの変遷—気づきの意味はいつまで理解されていたか—」(和泉書院『日本語論究4—言語の変容』所収, 9月)

1996 (平成8)

- 加藤浩司⑦ 「土佐日記『ありけるをむなわらは』の解釈について—『ありし』と『ありける』の機能の差異を手掛りとして—」(『信州大学人文学部人文科学論集(文化コミュニケーション学科編)』30, 3月)
 吉岡 曠⑩ 『物語の語り手—内発的文学史の試み—』(笠間書院, 6月)
 鈴木 泰⑨ 「アスペクト—チベット語と古代日本語の evidentiality に関連して—」(『国文学解釈と鑑賞』61の7, 7月)
 中西宇一⑤ 『古代語文法論助動詞編』(和泉書院, 7月)
 加藤浩司⑧ 「上接語の相違から見た助動詞キ・ケリの差異」(『国語学会平成8年度秋期大会要旨』所収, 10月)

本目録作成に際し、鈴木泰①1984, 同⑦1992, 福島邦道1987を参照した。記して謝意を表する。